

とりとめもなく

本 間 邦 雄

退職するにあたってなにか文を綴るといのは、こんな言い方は不謹慎で申しわけないが、憚りなく言うと、億劫ということばが沸きあがって身に纏いついて消えない。あらたまつて振り返るといのはあまり好みではないせいもある。これはもちろん怠惰のせいであるが、少し説明する必要があるとは思ふ。

見方を変えてみると、退職するということは即物的には研究室を引き払うということでもある。このところ、それには我ながら勤勉に取り組んでいる。積年の雑多な書類や物品（昔懐かしいテニスのラケットだけではなく、なぜかペタンクもある）、本・雑誌の山と格闘していると、さすがに20数年の年月の層にランダムに分け入る心地はしてくる。積年の弊ということばも脳裏を過るが、これにはなにか思いあたるふしがある。

京都にいた学生時代、あるときフランス語を勉強しようと思立って独学を試みたが、やはりはかどらない。翌年、大学の教養部の授業に追加登録して前期に文法を修め、後期は、小説家でもあるY先生の講読の授業に出席した。テキストは、20世紀のフランスの戯曲家イヨネスコの短編 *Oriflamme* (熾) であった。イヨネスコは、不条理劇で知られているが、この短編も不思議、不気味、滑稽で一筋縄ではとらえがたい。話はこうである。

主人公の男のアパートには、10年前から死体があつて、それがなぜかだんだん大きくなって、部屋からはみ出しそうになる。無精な男は妻に優柔不断をなじられ続けていたが、死体がのびて廊下に、キッチンに、すべてをひっくり返して壁に突き当たろうとする深夜、男はついに決心して、窓の錠戸を開け、外に引き出そうとする。あたかも自分の口から、内臓や胃腸、澱んだ感情や欲望、腐った考えやかび臭い妄想を次々に引き出すように。かくして悪戦苦闘しつつ、街の広場の真ん中までひきずってきたとき、死体はひらひら広が

て、軽くなっていることに気づく。と、そのひらひらの死体は男の身体に巻きついてヒューと鋭い音を立てる。周囲の建物に一斉に灯りがとまり、警官もやって来る。万事休すと思った瞬間、死体は巻き付いた男ともどもはたはたと夜空に舞いあがる幟となる。そして気がつけば、夜の銀河を全速力で翔けめぐっていた……。

40年以上前、京のとある寺の離れの下宿でこのテキストを予習しながら、妙に得心の行っていたことを思い出す。何年もぐずぐずしている自分を引き出す、掃き出すのはこのようにしてだろうか、幟となって舞い上がるだろうか、と思っていたかもしれない。卒業単位には関係しないこの授業の、Y先生ご自身の注釈付きのテキストは今も所持している。

それから十数年後、本学に奉職することになった。勤めた当初、還暦をお過ぎになった先生方が授業時にそれぞれ悠然と教室に赴かれているのを拝見して感服していたことも思い出す。他大学で何年も非常勤で教えていたが、授業前、できることならこの場からエスケープしたいものだと思いつつ教室に向かう私であっても、いつかはあの先生方のようになれるだろうかと思ったものだった。ところが、不肖、還暦を過ぎても、恥ずかしながら心境の向上はさほど感じられなかった。あまり振り返りたくないという心持の理由のひとつではある。それにしても、今、研究室から、私から、こうして引きずり出そうとしているのは何なのだろう。

してみれば、この小文も、憚りながらようやく引きずり出した体のもので、ひらひらのかたわれのような気がする。ところで、『論叢』は電子化されるという。さすればこの拙文は、銀河を渡る幟となること叶わず、果てしない電子の海の中、さしずめ海月か烏賊となって漂うことになるのだろうか。さもあらばあれと思ってみたりする。

(2016年3月)